

「風流」を伝えるムラ

——熊本県荒尾市菰屋の生活誌——

湯川洋司

一 課題

二 野原八幡宮と「風流」

三 菰屋の景観と集落構成

四 仕事と暮らし

五 イエの暮らし

六 イエとムラ

七 菰屋というムラ

神社には一二五一から一九〇二年まで記された神事記録が残されている。

その神社から一キロメートルほど西に菰屋の中心的な集落があり、さらにその北と南に一つずつ集落がある。しかし、村落組織としては菰屋北と菰屋南に大きく二分され、菰屋の村氏神である金社神社の祭祀組織も北と南の座に分かれている。

生活上もっとも基本的で重要な組織はヤシュクチと呼ばれる近隣集団であり、葬儀や結婚式、さらには農作業などの互助的集団として機能してきた。このヤシュクチは中世期に野原八幡宮の神事を支えた単位である「屋敷」に類似しており、菰屋が「風流」を保持し続けてきたことには、そのような古い形の組織を残す菰屋というムラの個性が関与してきたと思われる。

菰屋では近年は新たな宅地開発などにより新住民が増える傾向にあり、村落運営方式も変わりつつあるが、ムラの個性は今後どう変容するか、注目に値する。

論文要旨

本稿は、「風流」と呼ばれる中世的芸能を今に伝えている熊本県荒尾市菰屋の生活と民俗に関する調査報告である。荒尾市は熊本県の北西部にあり、三〇年前までは炭鉱で栄えてきた。菰屋は荒尾市のはば中央に位置する農業集落であり、現在では稻作と梨栽培が中心に営まれている。

「風流」は毎年十月十五日に行なわれる野原八幡宮の祭礼に際して、美しい「笠」をつけた二名の男児が大太鼓と小太鼓を打ちながら奉納する優美な舞である。また馬に乗った稚児が参拝する節頭という行事も行なわれる。この野原八幡宮は野原庄という莊園の守護神として勧請され祀られ始めたとされ、